令和7年度 第1回となみ散居村学習講座

「地名伝承学から考える『となみ』の意味」

日本地名研究所理事 中葉博文
令和7年6月7日(土) 午後1時30分～
於 となみ散居村ミュージアム

◆ 本日の講座内容

1. はじめにー地名とは何か
2. 地名伝承学による「地名」研究と古代「風土」学
3. 文献上に於ける地名『となみ』の発生時期ー『となみ』の起源・表記
4. 古代越中国の風土と地名『となみ』
5. 『となみ』の意味
6. おわりにー地名は空気のような存在、だから興味・関心をもとう

1. はじめにー地名とは何か

●柳田國男（民俗学者）…「二人以上の人の間に共同に使用せらるる符号」

（『地名の研究』昭和11年 古今書院）

●鏡味完二（地理学者）…「地名は土地を区別するためもうけられた名であるが、多くの地名は単なる土地の符号ではない。」（鏡味完二『日本の地名』昭和39年 角川書店）

●鏡味明克（国語学者）…「地名は番地のような単なる符号ではない。地名には個性があり、固有名詞として、他の地名と区別する固有性を持っており、命名者のその地名に与える表現性を持っている。」（『地名学入門』昭和59年 大修館書店）

☛地名は何を語るか。「地名が語るのは、まずその地名が経てきた歴史である。改変が行われずにきた地名は命名当初の時代を物語っている。」

★ **地名**とは何か。

「二人以上の人の間に使用せらるる符号」他ならぬ土地に付けられたものであるから**単なる符号ではありえない。**（柳田国男）

「地名は番地のような単なる符号ではない。**地名には個性があり、固有名詞として、他の地名と区別する固有性を持ち、命名者のその地名に与えた表現性をもっている。**（中には固有性、表現性の希薄な地名もあるが…）」

（鏡味明克）

☛ 言い換えれば、（例えば）**地名は何を語るのか。**

まずは、その地名が経てきた**歴史を語る**。次に語るものは**地理、地形**である。また、地名は**過去を語る**。それは、我々に**失われた自然をも教えてくれる**。さらには、地名も**言語**の一環であり、古地名は古語を物語る。また、地名はその名づけられている地方の方言をも語るなど、**地名はさまざまな内容を語る、文化的価値のきわめて高い存在**である。

☛ 歴史的遺産、**文化財としての地名の価値**を知る出発点は「地名の語源」の正しい認識である。地名の語源を確かに掴むためには、**地名を言語・地理・歴史の上で正確にとらえることが必要。**

★★ 地名の性質

■千葉徳爾（地理学者・民俗学者）…「地名は瞬間的に変化するのではなく、多少の呼称はあっても、**かなり長い期間にわたって継続する性質をもつ**。したがって現時点で考察するには、その**発生から考える必要がある**。また、その**意味・内容から分類して研究**しなければならない。この分類に当たっては、**●一地点の名称と●広い範囲を指す地名**とは、おのずから意味・性質を異にする。雑多な地名の手当たりしだいな解釈は、決して正しい理解に到達するものではない。」

（『新・地名の研究』平成6年 古今書院）

2. 地名伝承学による「地名」研究と古代「風土」学

「地名伝承学」を定義…「地名の発生時期の確認・比較考察・意識・分布・伝承過程の究明、特に文字（文献資料）との関係を層序的に立証することによって、古代史実の解明を試みようとする学問」—狭義の古代風土学である。

(池田末則著『地名伝承学』日本地名学研究所 昭和 61 年 4 月)

☛ 「地名伝承学」という池田独自の「地名論(地名伝承学):池田末則著『日本地名伝承論』(昭和 52 年 平凡社)」で、昭和 56 年 1 月に國學院大学から文学博士の学位が授与され、「地名伝承学」という『地名論』を確立。

● **風土学**とは、「環境」と「人間」の不可分(物事を互いに切り離せない)の關係に根差す存在(根本的・普遍的な規定を考察し、規定する哲学)論。主体と客体の分断を超える「通態(通常の状態)」を提唱する学問。

古代とは、一般的に奈良時代から平安時代のことを指す。具体的に言うと、奈良時代の始まりの 710 年から平安時代の終りである 1185 年までのこと。約 500 年間のことを一般に「古代」と呼んでいる。あくまでも一般論、大和朝廷時代(原始古代)も含めて古代と呼ぶ場合もある。

3. 文献上に於ける地名『となみ』の発生時期—『となみ』の起源・表記

■文字(文献資料)による立証

① 「となみ」の発生時期—(1)初見(文献)と(2)「となみ」の用字(用いた文字(表記))

① 『古事記』…古事記(こじき)とは、日本最古の書物であり、712 年に編纂された歴史書です。この書物には、天地の始まりや神々の誕生、日本の国づくり、初代天皇から推古天皇までの歴史が記されています。古事記は日本の神話や文化の根幹を理解するために欠かせない重要な文献です。

- 孝靈天皇の条「日子刺肩別(ひこさしかたわけ)命は、高志の**利波臣**…祖なり。」(『日本古典文学大系 古事記』(昭和 33 年 岩波書店)) 文献上の初見・表記は「利波」である。☛高志の利波臣は越中国礪波郡に因んだ氏族名。

② 『続日本紀』…『続日本紀』(しょくにほんぎ)は、平安時代 初期に編纂された勅撰史書。『日本書紀』に続く 六国史 の第二にあたる。菅野真道らによって 延暦 16 年(797 年)に完成した。文武天皇 元年(697 年)から 桓武天皇 の延暦 10 年(791 年)まで 95 年間の歴史を扱い、全 40 巻から成る。奈良時代 の基本史料である。

- 天平十九年(747)九月二日条「越中国の人で無位の**礪波臣志留志**は米三千石を盧舎那仏(東大寺大仏)へ寄進として献上したので、…外従五位下を授けた。」(直木孝次郎『続日本紀 2』東洋文庫(平凡社) 昭和 63 年)
- 神護景雲元年(767)三月二十日条「外従五位下の**利波臣志留志**を越中員外介に任じ」(直木孝次郎『続日本紀 3』東洋文庫(平凡社) 平成 2 年)
- 宝亀十年(779)二月二十三日条「従五位上の**利波臣志留志**を伊賀守に任じ」(直木孝次郎『続日本紀 4』東洋文庫(平凡社) 平成 4 年)

★**利波臣・礪波臣**…日子刺肩別命。越中国礪波郡を本拠地とした氏族。

『古事記』では日子刺肩別命(孝靈天皇の御子)の後裔氏族として名がみえるが、『日本書紀』には登場しない。

利波は礪波とも書く。☛「礪波」・「利波」と混同される。

★★**利波臣・礪波臣**…その活動もほとんどは★礪波郡内に留まったと推測されるが、そのなかで唯一叙爵に預かり、六国史に記録を残したのが★利波臣志留志である。

【六国史】古代日本の律令国家が編纂した 6 つの一連の正史のことで、日本における国家事業としての史書の編纂は飛鳥時代から平安時代前期にかけて行われ、6 つの史書が残されたため、これを六国史と呼んでいる。

名称	時代	年代	完成年	撰者
日本書紀	神代から持統天皇まで	～697年	720年(養老4)	舎人親王
■ 続日本紀	文武天皇から桓武天皇まで	697年～791年	797年(延暦16)	菅野真道・藤原継縄等
日本後紀	桓武天皇から淳和天皇まで	792年～833年	840年(承和7)	藤原冬嗣・藤原純嗣等
続日本後紀	仁明天皇の代	833年～850年	869年(貞観11)	藤原良房・春澄善縄等
日本文徳天皇実録	文徳天皇の代	850年～858年	879年(元慶3)	富士和・菅原是善等
日本三代実録	清和天皇から光孝天皇まで	858年～887年	901年(延喜元)	藤原時平・菅原道真等

③「越中国石黒氏系図」では「**利波評**」と記す。

④1961年に平城宮で出土した和銅三年(710)の年紀をもった荷札木簡「越中国**利波郡**」とある。

☛**評(こおり、ひょう)**とは、古代朝鮮および古代日本での行政区域の単位である。日本では7世紀後半までに全国各地で設置されたが、701年以降は「**郡**」に改められた。『日本書紀』は大化の改新(645年)の時に郡が成立したと記すが、実際に郡が用いられるのは大寶律令(701年)制定以降である。

★★★**礪波郡**…大寶律令の施行を境に「利波評」から「利波郡」に変わり、恐らくは「諸郡の郡・郷名に好字を用いよ」となる和銅六年(713)年頃から「**礪(礪)波郡**」が用いられたと推定される。

(※これに伴って、郡・郷の名称が改められ、本来の地名の名義や地名表記が失われてしまったことがすくなくなかった。地方では従来の地名あるいは地名表の多くを失うこととなった。)

和銅六年の制では「二字で地名表記せよと命じていない。」その後、神龜三年(726)頃にも地名改正が行われた。『出雲風土記』「出雲国意宇郡の拜志郷」は、もと「林」や「出雲国飯石郡多禰郷」ももと「種郷」で表記されていた郷名を二字で表記するように改めた。平安時代の『延喜式』には「二字を用いよ」とあり、和銅六年の制では、明記されていないが、『風土記』の地名改正の実例からもわかるようにすべて二字表記に統一されている。二字による地名表記は、その頃は自明のこととされていたものと理解できる。

■『正倉院文書』…奈良県の東大寺正倉院に伝来した文書群。天平期を含む8世紀の約50年間(727年-776年、神龜4年-宝龜7年)に、東大寺写経所で作成された帳簿類である。☛『正倉院文書』は「礪波郡利波臣」と区別。

☛8世紀の段階では、「利波」と「礪(礪)波」と混同されるが、次第に「礪(礪)波」の用字が定着するようになる。

■『万葉集』(旧字体：萬葉集)…奈良時代末期に成立したとみられる日本に現存する最古の和歌集。7世紀前半から759年(天平宝字3年)までの約130年間の歌が収録されており、**成立は759年から780年(宝龜11年)ごろにかけてとみられ、編纂には大伴家持が何らかの形で関わったとされる。**完本では鎌倉時代後期と推定される西本願寺本万葉集がもっとも古い。

⑤『万葉集』…①礪(礪)波郡、②礪(礪)波山、礪(礪)波の関など、古代礪波郡の範囲の様子を知る礪(礪)波郡、山名、遺跡が詠まれている。(4. 古代越中国の風土と地名『となみ』で詳細に述べる。)

■『和名類聚抄』…平安時代中期に作られた辞書。承平年間(931年-938年)、源順(みなもとのしたごう)が編纂した。略称は和名抄(わみょうしょう)。『和名類聚抄』とは、平安時代中期—承平年間(931~938)に、源順(みなもとのしたごう)によって編纂された辞書。辞書の体裁は、漢語の名詞を部類に分けた後、**万葉仮名で「ことば」に対応する和名の読み(和訓)を記す**とともに、さまざまな漢籍を引用しながら、その「ことば」に説明を加える、というもの。

☛ 礪波や利波の訓は■『和名抄』に「**止奈美**」 ■『万葉集』巻17・18に「**刀奈美**」

※万葉仮名とは、古代の日本で日本語を表記するために漢字(真名)の音を借用(仮借)して用いられた文字である。片仮名や平仮名の誕生前の日本において、漢字のみで日本語を記述するために用いられ、『万葉集』(万葉集)での

表記に代表されるため万葉仮名と呼ぶ。万葉仮名は、漢字(真名)を使った仮名の始まりとされ、真仮名(まがな)、真名仮名(まながな)とも言い、用法上は仮名的一种だが、字形としては漢字である。9世紀に入ると、この万葉仮名をもとに片仮名や平仮名が考案され使われ始めた。

☛下記の1字1音万葉仮名一覧(上代特殊仮名遣(甲類・乙類))を別頁参照。

■『延喜式』…平安時代中期に編纂された格式の式(律令の施行細則)をまとめた法典。延喜5年(905年)から藤原時平らが編纂を始め、時平の死後は藤原忠平が編纂に当り、『弘仁式』『貞観式』とその後の式を取捨編集し、延長5年(927年)に完成。その後改訂を重ね、康保4年(967年)より施行された。

☛『延喜式』は「礪波」

【古代の礪波地方を知る史跡・木簡・絵図】

- 史跡 桜町遺跡(小矢部市桜町) 平安時代の集落と古代道路跡 [長岡]墨書土器
- 飛鳥京跡苑池遺構出土木簡 ・高志国利浪評
- 平城宮跡出土木簡 ・越中国利波郡川上里鮒雑
- 平城宮跡出土木簡 ・利波郡大野里
- 東大寺荘園絵図 天平宝字三年(七五九)「越中国礪波郡石栗村官施入田地図」(奈良国立博物館)
「越中国礪波郡伊加流伎開田地図」(正倉院宝物)
- 神護景雲元年(七六九)「越中国礪波郡井山村墾田地図」(正倉院宝物)
- 「越中国礪波郡伊加留岐村墾田地図」(正倉院宝物)
- 「越中国礪波郡杵名蛭村墾田地図」(正倉院宝物)
- 神護景雲元年(推定) 「越中国礪波郡石栗村官施入田地図」(天理大学附属天理図書館)

○『和名類聚抄』郡名「止奈美」

管郷 川上・八田・川合・拜師・長岡・大岡・高楊・陽知・三野・意悲・大野・小野

○『延喜式』神名帳

高瀬神社・長岡神社・林神社・荊波神社・比売神社・雄神神社・浅井神社

※ 鎌倉時代以後の軍記物などでは「礪並」「戸波」「戸並」、他には「都波郡」「井波瑞泉寺勸進帳」。「礪浪」「本朝通鑑」。加賀藩五代前田綱紀(つなとし)の頃、「利波郡之字礪波」に書替候事」

4. 古代越中国の風土と地名『となみ』

■古代越中国とその「郡(こほり)」

- ①古代は「②律令の時代」ともいわれ、大宝年間にさだめられた大宝律令によって、地方制度ができあがった。それは、国・郡・郷(里)で、国は今日のほぼ府県に相当する。

(一)越中国の成立

○越(こし)

越前・越中・越後三国の総称。現在の福井(東部)・石川・富山・新潟の諸県に当たる。古代北陸一帯をコシと呼ばれ、「高志」(『古事記』)、「越」(『日本書紀』)、「古志」(『出雲風土記』)。

『万葉集』では、「越」(巻十七の四〇一一、四〇一七歌中、巻十九の四二五〇)、「故之」(巻十七の三九六九、巻十八の四〇七一)、「故志」(巻十九の四一五四)、「故事」(巻十八の四〇八一)、「古之」(巻十八の四一一三)

などと表記された。

(※ 越国を三分割・・・越前国・越中国・越後国→七世紀の末頃、天武天皇の頃か。)

出土木簡例からすると、七世紀後半には「高志国」が置かれ、天武十二年(六八三)～同十四年(六八五)にかけての国境画定作業より三国に分割されたと推測される。

表一 越中国の変遷

大化以前	大化二	天武十二	大宝二	養老二	天平十三	天平十五	天平勝宝四	天平宝字元	弘仁十四	
越洲	六四六	六八五	七〇二	七一八	七四一	七四三	七五一	七五七	八二三	
	若狭	若狭	若狭	若狭	若狭	若狭	若狭	若狭	若狭	
	越洲	越前	越前	越前	越前	越前	越前	越前	越前	越前 加賀
		越中	越中	能登	越中	越中	越中	越中	能登	能登
				越中					越中	
越後	越後	越後	越後	越後	越後	越後	越後	越後		
佐渡		佐渡	佐渡	佐渡	佐渡		佐渡	佐渡	佐渡	

(二)越中国の四郡

○ 郡(こほり)とは

郡は国の下にあり、里(郷)を統べる行政単位で、コホリと読む。これは朝鮮語からきているという説もある。

● 『続日本紀』の大宝二年(七〇二)甲申(一七日)条によれば、「越中国四郡を分かちて、越後国に属せしむ」とあり、これが越中国の初見。

★大宝二年の「越中国四郡分割」について—四郡とはどこなのか。

■ 『延喜式』神名式に、北陸道諸国の郡名をその序次に従って列挙してみる。

- 若狭国・・・ 遠敷 大飯 三方
- 越前国・・・ 敦賀 丹生 今立 足羽 大野 坂井
- 加賀国・・・ 江沼 能美 石川 加賀
- 能登国・・・ 羽咋 能登 鳳至 珠洲
- 越中国・・・ 礪波 射水 婦負 新川**
- 越後国・・・ 頸城 古志 三嶋 魚沼 蒲原 沼垂 磐船
- 佐渡国・・・ 羽茂 雑太 賀茂

表二 越中国の「郡」の変遷

越中国	古代	中世	近世	幕末	明治十一年以降	明治二十九年～昭和・平成大合併以前まで
	新川	東部	新川	上新川	上新川	上新川
				下新川	下新川	下新川
	婦負 射水	中部	婦負 射水	婦負	婦負	婦負
				射水	射水	射水 氷見
	礪波	西部	礪波	礪波	礪波	東礪波 西礪波

(三)大伴家持と当時の砺波郡(砺波地方)

●大伴家持とは

大伴家持は、(大納言大伴旅人の長男として誕生については、靈龜二年(七一六)と養老元年(七一七)などの諸説がある。)

天平十八年(七四六)六月二十一日越中国守に任命され、翌月の二十日頃に越中国府の(現在の高岡市伏木)に着任した。(『続日本紀』に「従五位下大伴宿禰家持を越中守と為す」と記す。)

以後、天平勝宝三年(七五一)八月、任務を終えて少納言となって帰京するまでの五年間余りを越中の地で過ごした。

→ 家持二十九歳で赴任する。五年間越中守として滞在。

養老 二年 (七一八) 家持誕生 (大納言大伴旅人の晩年の子)

天平 三年 (七三三) 初詠歌・振りさけて 十六歳

肉親の縁は薄い、幼少で両親と別れているが、家柄と才能に加え、早くから和歌・漢詩・法律などにわたる高い教養を身に付けた洗練された青年に育った。

天平十年 (七三八) ~

天平十六年 (七四四) 内舎人

天平十八年(七四六)~ 家持 二十九歳

天平勝宝三年(七五一) 越中在任(国守) 三十四歳

天平宝字 (七五一) 終焉歌・新しき 四十二歳

延暦四年 (七八五) 死亡 追放 六十八歳

大同元年 (八〇六) 追放解除 八十九歳

● 歌人家持として

『万葉集』の四、五一六首のうち家持が詠んだ歌は、四七三首

越中国守以前 (十四年) 一五八首 (長歌：五、短歌：一五三)

越中国守時代(五年) 二二三首(長歌:三五、短歌:一八五、旋頭歌:一)

越中国守以後 (八年) 九二首 (長歌：六、短歌：八六)

※ 越中時代は歌人家持にとって、非常に短い年月であったかもしれないが、また重要な時代でもあった。

■「越中万葉」とは

『万葉集』二十卷、その巻末四巻は家持の天平十八年から歌日記によって編纂されたことは疑いない。巻末四巻の最初の巻十七は、冒頭に天平二年から十六年までの歌三十二首を補遺として載せ、天平十七年の歌記録はないまま、天平十八年正月の宮中の雪の歌五首を家持の記録から追補した後、家持の越中守赴任の時の歌になる。家持の叔母大伴坂上郎女の三九二七から、ここから六年後の家持が越中から都へ向かう路上での歌の最後四二五六までを一区切りとして「越中万葉」といわれている。

巻十七	三八九〇~三九二一	天平二年~十六年の補遺
	三九二二~三九二六	天平十八年正月の雪の歌 五首 (家持の記録)
	三九二七~四〇三一	一〇五首
巻十八	四〇三二~四一三八	一〇七首 「越中万葉」三三〇首(三三七首)
巻十九	四二五七~四二九二	三六首
巻二十	四二九三~四五一六	二二四首

※ 「越中万葉」は、この三三〇首の他に、『万葉集』巻十六に、能登国歌 三首 三八七八~三八八〇
越中国歌 四首 三八八一~三八八四

● (地名数)→『万葉集』に出ている富山県関係の地名数は、約百四十(巻十七・十八・十九に収録されている。)

■当時の越中国の政治情勢

- ・ 越中国は、射水・礪波・婦負・新川・能登・羽咋・鳳至・珠洲の八郡。
- ・ 越中国は東大寺の墾田として、非常に大切なところであった。
- ・ 聖武天皇は、大仏の鑄造に力を入れていた。

★礪波郡(となみのこほり)の範囲

越中国の郡名。『和名抄』に国府が置かれた郡。

位置的に、越中国の西部に位置し、東は婦負(めい)郡、南は飛騨(ひだ)国(岐阜県)、吉城(よしき)郡・大野(おおの)郡、西は越前国加賀郡(石川県)、北は射水(いみず)郡及び能登(のと)国(石川県)羽咋(はくい)郡に接する。

現在の礪波市(旧礪波市・庄川町)・南礪波市(旧福野町・福光町・井波町・城端町・利賀村・井口村・平村・上平村)・小矢部市及び高岡市(旧高岡市・福岡町)の一部を含む地域であった。

(『万葉集』では、巻十七の四〇二一題、巻十八の四一三八題)

★★郡家(ぐうけ:郡役所)の所在

郡家は小矢部市道林寺遺跡から「郡」と書かれた平安時代前期の墨書が出土しており、その付近に比定される。

(四)『万葉集』から見る地名「となみ」と風土

『万葉集』…礪(礪)波郡、礪(礪)波山、礪(礪)波の関などを詠み、古代礪波郡の風土も知ることができる。

■礪(礪)波山 万葉地名 …①山の語意、②山はどこにある

…見渡せば 卯の花山の ほととぎす 音のみし泣かゆ 朝霧の 乱るる心 言に出でて 言はばゆゆしみ

礪波山 手向の神に 幣奉り 我が乞ひ禱まく… ((巻十七の四〇〇八)

…君と我と 隔てて恋ふる 礪波山 飛び越え行きて 明け立たば 松のさ枝に 夕さらば 月に向かひて あやめぐさ 玉貫くまでに 鳴きとよめ 安眠寝しめず 君を悩ませ ((巻十九の四一七七)

★ 礪波山(となみやま)とは、富山県小矢部市と石川県河北郡津幡町とにまたがる倶利伽羅山(標高二七七^尺)の古称。また、広義には矢立山・源氏ヶ峰・国見山などを含む付近一帯の山地。同山は、『平家物語』『源平盛衰記』に倶利伽羅合戦の舞台になったところとして描かれているところでもある。かつては越前・越中の国境の山でもあり、北陸道はこの山の中を通っていたとされる。

■礪(礪)波の関 万葉地名 …①礪波の関の語意、②礪波の関とは、その存在

天平感宝元年五月五日に、東大寺の占墾地使の僧平榮等に饗す。ここに守大伴宿禰家持、酒を僧に送る歌一首焼き大刀を 礪波の関に 明日よりは 守部遣り添へ 君を留めむ ((巻十八の四〇八五)

★礪波の関(となみのせき)とは、古代の越前と越中の国境、越中国側に置かれた関所。富山県小矢部市の礪波山麓と推定される。小矢部市蓮沼(西蓮沼)に関跡と伝える碑があるが、北側の小字関野の地名が残る石坂付近が有力視される。

○礪波の関は越前国深見(現在石川県津幡町)から越中国の坂本(現小矢部市)に通じる礪波山越えの道筋に、主として軍事上の必要から設けられていた関所らしいが、設置された年も、関所跡と考えられる遺跡の所在地もまだ明らかになっていない。

●「となみ」と呼称する類似地名 ☞イ・ロ・ハは、比較的新しい地名

イ. 他に越中国(富山県)における「となみ」地名

- ・利波(富山県射水郡本江村字利波、富山県婦負郡八幡村字利波、富山県射水郡下村字利波)

ロ. 越中国(富山県)以外の「となみ」地名

- ・戸波(秋田県雄勝郡駒方村字戸波)
- ・利南(群馬県利根郡利南村)
- ・利波(新潟県岩船郡利波村) ← 越後の利波郷
- ・外波(新潟県西頸城郡外波村)
- ・富波(岐阜県山県郡富波村)
- ・豊南(愛知県渥美郡高豊村)
- ・礪波(北海道空知郡栗沢村)

ハ. 地名以外の名称(河川名・半島名)

- ・富並川(山形県北村山郡富並川)
- ・斗南半島(青森県下北郡斗南半島)

(日本地名学研究所『日本歴史地名総索引』(昭和 55 年 名著出版))

■ 全国各地に現存する「トナミ」地名とその由来

トナミ地名は、全国的にもいくつか見られる地名である。表記は、現在の砺波市の砺波の他に、①礪波(北海道名寄市)、②渡波(宮城県石巻市)、③戸波(秋田県増田町・高知県土佐市)、④外波(新潟県青海町)、⑤利波(富山県富山市・南砺市・射水市)、⑥砥波(鳥取県日南町)などがある。

5. 地名『となみ』の意味

●「トナミ」の謂れ(いわれる)は何かー由来説

古代越中の「トナミ」には、次のような由来説が考えられる。

- ト…
- ①「場所」を示す接尾語:トコロ(所・処)の意。
 - ②接頭語:特に意味がないが①に通ずるか。
 - ③ト(戸、門)で①出入口や②谷間や海の狭くなった意。
 - ④ミナト(水門)で港の意。
 - ⑤ソト(外)の上略で①「外側」②「遠く離れた所」の意。
 - ⑥和数詞の①「十」、さらに抽象的に②「数多くの～」の意。
 - ⑦形容詞トシ(利)の語幹で①「険しい地形」②「高く尖った所」の意。
 - ⑧アトの上略形:アトは①ア(湿地)・ト(所)②アミ(網)・ト(処)③川岸の崩れる所④崖地⑤傾斜地などの意。
 - ⑨トリ(鳥)の下略形:トリは①動詞トル(取る)の連用形「切り取られたような地形から崩壊・浸食地形」②ト
ロの転で「緩傾斜地」③タワリの転で「峠」④鳥類に関する意。

★上代特殊仮名遣いでは、③・④・⑤・⑦が甲類。⑥・⑨が乙類。①・⑧は甲乙類の両形

- ナミ…
- ①ナミ(波)の意で「波打ったような地形」の意。
 - ②ナメ(滑)の転で①「平坦地」②「緩傾斜地」③「垂直に近く切り立った所」などの意。
 - ③ナミ(並)で「二つのものが並んだ所」の意。
 - ④①「海岸」②「水辺」の意。
 - ⑤ナメの意で「崩壊・浸食地形」の意。

●門波(となみ)・「と」は港、瀬戸。瀬戸に立つ波の意。丸山林平『上代語辞典』(昭和 42 年明治書院)

・海峡や川口に立つ波の意。中村幸彦他編『角川古語大辞典』(平成 6 年角川書店)

・海峡に立つ波の意。中田祝夫他編『古語大辞典』(昭 58 小学館)/金田一晴彦編『新明解古語辞典』(昭 54 三省堂)

●門浪(となみ)・海峡に立つ浪。澤瀉久孝他編『時代別国語大辞典 上代編』(1990 年 三省堂)

☛「粟島に漕ぎ渡らむと思へども、明石の門浪いまだ騒けり」(『万葉集』巻 7 の 1207)

●鳥網(となみ)・鳥を捕らえるために張る網。

丸山林平『上代語辞典』(昭 42 年明治書院)/中村幸彦他編『角川古語大辞典』(平 6 年 角川書店)/ 金田一晴彦編『新明解古語辞典』(昭 54 年三省堂)澤瀉久孝他編『時代別国語大辞典 上代編』(平 2 年三省堂)

・(と(鳥)のあみ(網)の約)鳥を捕獲するための網の意。中田祝夫他編『古語大辞典』

(昭 58 年小学館)

☛「彼面此面(をてもこのも)に等奈美張り、守部をすゑて」(『万葉集』巻 17 の 4011)

●となみ(礪波・砺波)…越中国の郡名。

古くは「利波」とも表記された。富山県西部の小矢部・砺波両市域と東砺波・西砺波両郡域。ならびに高岡市の一部に当る。

■郡名は題詞中に二回記載されているが、いずれも「礪波郡」と表記されている。

●となみやま(礪波山)…石川県河北郡と富山県西礪波郡との境にある山。

富山県小矢部市に属する。標高 277m。この山路を「くりから峠」という。「刀奈美夜麻手向の神に幣奉り、吾が乞ひ祈のく」(『万葉集』巻 17 の 4008)「利波山飛び越え行きて」(『万葉集』巻 19 の 4177)丸山林平『上代語辞典』(昭和 42 年 明治書院)

■池主の歌では「刀奈美夜麻」、家持の歌では「利波山」と表記されている。

●となみのせき(礪波の関)…加賀国(石川県)から越中国(富山県)に越える礪波山に設けた関所。関跡は未詳。

礪波の関は、富山県小矢部市に属する山。「焼刀(やきたち)を刀奈美能勢伎に明日より守部遣り副へ君を留めむ」(『万葉集』巻 18 の 4085)丸山林平『上代語辞典』(昭和 42 年 明治書院)

■礪波の関は一回、「刀奈美能勢伎」と表記されている。

☛「となみ」という固有名詞の初見は『古事記』の「高志之利波臣」で、古くは「利波」がされていたが、後に「利波」と「砺(礪)波」が混同され、そして、後に「砺(礪)波」が優位に。さらに後に、地名は「砺(礪)波」、人名は「利波」か!?

★★★上代特殊仮名遣いによる「と」『万葉集』での「利波」の「利」は甲類。

「刀奈美」の「刀」は甲類。

「砺(礪)波」の「砺」は甲類。

『和名抄』での「止奈美」の「止」は乙類。

★★★上代特殊仮名遣いによる「な」『万葉集』での「刀奈美」の「奈」は甲乙類(区別なし)。

『和名抄』での「止奈美」の「奈」は甲乙類(区別なし)。

★★★上代特殊仮名遣いによる「み」『万葉集』での「刀奈美」の「美」は甲類。

『和名抄』での「止奈美」の「美」は甲類。

万葉仮名一覧

清音・濁音はカタカナで表示した。(甲)は甲類、(乙)は乙類の略、△は甲乙いずれか所属不明のもの、↓は2字で1音を示すもの、太字は訓仮名、それ以外は音仮名である。

ア	阿阿鞞安愛吾余我足 ↓嗚呼	イ	伊以異易怡壹移已意夷 肆射隆 ↓五十	ウ	宇汗紆于禹羽烏有雲得 菟兔卯 ↓可愛 行愛哀埃衣依楨往得 延曳奢觀益安縁裔 兄柄枝吉江 △穎娃翳英鹽	エ	才於淤噓意憶憶飲乙矣 應愛 カ	カ	カ加迦伽架嘉賀可詞 柯柯河河歌何珂奇 箇介家閑汗甘香鹿蚊日 歟	キ	河荷互 キ(甲)岐伎妓吉棄弃積企 耆祇祇寸杵服來 (乙)歸己紀記忌幾幾其奇 綺騎奇氣既貴矣木坡樹 △磯起喜 ギ	ギ	ギ(甲)藝伎儀儀祇嗜 (乙)疑擬義宜 △穀	ク	ク久以句絢口區矩麗麗苦 君衢九鳩孔丘求救球恭 勾拘具俱群來	ケ	ケ(甲)愚遇娛虞隅求 啓價賈結異 (乙)氣開既概概該階成 凱愷居舉希毛食飼消寄	コ	コ(甲)介慰遺藝 ゲ(甲)牙雅下夏竟 (乙)宜義端尋碍礙傷削 コ(甲)古胡故姑姑固高庫顧 孤子兒小粉籠 (乙)許己巨渠去居虛舉據 莒興木 △沽箇	ク	ク(甲)胡吳誤虞五吾悟後 ジ(乙)其基期語駁御 サ(乙)左沙娑紗紗差瑳嵯嵯 作舍散草柴積而陸讓注 狹狹猿 ザ	ケ	ケ(甲)邪奢社莊藏狀射謝坐座 シ(乙)斯志師色之芝士始辭時 詩侍旨指思佛此紫信靈 伺嗣司詞式試次資純施 茲滋子尸矢笑新四死趾 事水進悉自系祀肆私枳 石磯 ↓羊蹄一二二重一並一 ジ士自珥茸餌兒爾貳盡慈 細仕寺時事字 ス	ク	ス(甲)須須州洲素殊輸秀王 酒瀆數諏寸儒壽酢巢櫟 栖酸實鳥渚 ズ	ク	ズ(乙)受授儒儒聚 七世勢西栖齊劑制細施是 湍瀨背迂迨 ↓石花 七是莖莖	ク	ク(甲)蘇蘇宗素沂祖巷嗽十 麻磯 ↓(甲)追馬 (乙)曾曾贈贈僧僧則賊所 諾其衣襲齋彼苑	ク	ク(甲)贈贈疏楚 ソ(甲)俗 (乙)叙存躡鋤序茹 △贈	ク	ク(甲)多侈侈他拖拖陀陀太馳 當黨託丹淡談澹田手 夕陀陀太駄駄囊囊彈囊 夕知智致緻池馳管至治週 鎮趾峙值珍陳道干乳茅 父血市 夕暹治泥泥泥地膩 夕都免免寃寃徒通追空鬪 豆川津 夕豆頭豆圖琴 夕三底底臣帝諦題堤堤傳 天亭手代直 夕傳殿提泥歪耐涅弟低位 另出 夕(甲)斗土杜度度妬覩走 塗都圖屠外砥礪戸臍利 速明 夕(乙)止等登都騰騰臺吉澄 得迹跡馬十與常飛 △兎東 下(甲)度奴怒渡 (乙)杼膝膝騰騰耐特 夕那那難難奈奈乃南男寧 名浪中菜魚七莫 二爾爾適述爾耳珥尼仁 貳而人兒柔丹養煎何似 于	ク	ク(甲)怒努努 又(乙)奴農農莊沼澤渚寐犬 去 夕(乙)能乃迺努努寃寃野	ク	ク(甲)波皮破婆婆播播播播播半 絆判判胖巴把盤方芳房 薄博泊發撥番葉羽齒髻 石八者早速 ハ	ク	ハ(甲)婆靡靡魔魔摩伐馬 嬪日水檜負飯 (乙)非斐悲肥彼被飛秘火 乾煎槌 △皮裨碑 ビ	ク	ビ(甲)毘毗毗罪罪彌彌彌 (乙)備眉媚廢傍 △味 フ	ク	フ(甲)布賦浮赴甫輔府符不否 敷富副普父夫扶經生歷 乾 フ夫扶服步予霧驚部文父 福 フ	ク	フ(甲)幣弊弊蔽蔽蔽平裨霸陛 反返遍部隔方重邊畔冢 (乙)閉閉倍陪杯珮俳俳沛綜 瓮任甕施鈺經戸 △俾音 ベ	ク	ベ(甲)辨輩誣便別 (乙)倍每 ホ	ク	ホ(甲)富本苦番蕃品保褒褒朋 袍報倍陪布凡煩之實抱 穗粒火頰大大帆 ホ煩 マ	ク	マ(甲)麻靡靡魔魔莽馬萬萬滿 明末目眞信間 ↓喚大 ミ	ク	ミ(甲)美彌彌彌耳寐滄民三 參細見視眷水 (乙)微末味尾箕實身	ク	ム(甲)牟无無武鷓務霧霧謀謀 模倣身六將 ↓牛鳴 メ	ク	メ(甲)實咩謎緇緇馬女 (乙)米每梅瑤妹昧昧目眼 △迷免 ↓(乙)海藻 モ	ク	モ(甲)母 (乙)母 △茂謀慕暮謀摸摸莫莫望 莽梅文門問聞蒙勿物忘 木擬蒙喪藻面 ヤ	ク	ヤ(甲)夜也椰椰耶野揚移陽養 掖益治屋八矢箭文絞厭 ユ由諭諭愈與與遊悠融 湯結忌袖弓 ヨ	ク	ヨ(甲)用庸遙容欲夜 (乙)余與豫餘譽預已四世 代吉 △輿 ラ	ク	ラ(甲)羅邏囉囉良浪郎朗樂等 里理裡釐利喇梨梨離隣 驪入 ル	ク	ル(甲)流琉留留屢屢樓樓盧盧 縷漏類 レ	ク	レ(甲)禮禮例列列黎黎連麗村 口(甲)漏路露樓樓魯盧 (乙)呂侶閭慮慮樓樓魯盧 ワ	ク	ワ(甲)倭婉過丸王輪我 斗韋胃滑謂威委萎偉位爲 尉井猪居藍座 エ	ク	エ(甲)惠衛穢會隈回迴畫越殖 咲 ウ	ク	ウ(甲)衰遠烏鳴鳩嗚乎呼弘泓 迴腕越惡怨溫日尾小男 士峽雄麻緒少叫
---	------------------	---	--------------------------	---	--	---	-----------------------	---	--	---	---	---	-----------------------------	---	-------------------------------------	---	--	---	---	---	---	---	--	---	---	---	--	---	--	---	--------------------------------------	---	---	---	---	---	---	---	--	---	-------------------------------------	---	--	---	--	---	-------------------------	---	--	---	--------------------------------------	---	---------------------------------------	---	-------------------------------------	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	----------------------------	---	--	---	---	---	--------------------------	---	---

【(従来の説)まとめると…。】

A説… 鳥網の義に由来する。

※ トナミの語源について、「森田柿園は『万葉集』にしばしば「鳥網(となみ)張る」という語があるのを引き「鳥網の義か」(『越中志微』)と説いているが、「鳥」のトは上代特殊仮名遣い上、乙類に属し、礪波のトは甲類に属し、**仮名遣いが一致しないので、この説は承認するわけにいかない。**」

(廣瀬誠『越中萬葉と記紀の古伝承』平成8年 桂書房)

B説… 港・瀬戸・海峡に立つ波に由来する。

C説… 狭い山谷の並んだ土地に由来する。

D説… 高くなって所が崩れたことに由来する。

E説… トは接頭語、ナミは「平坦で滑らかな地」の称か。

F説… トは接頭語、ナミは「並み」で山・川などが並んだ地形をいうか。

G説… トナハトラの転で「崖、自然堤防」のことか。

6. おわりに一地名は空気のような存在、だから興味・関心をもとう

地名は、本来、小字などが拡大したものであるが、古代に地名においては、郡名など広範囲の総称していたものが多い。

現在のトナミは古代の地名意識が移動したものである。もともと、現在の小矢部市辺りの土地を呼称していた名称が、だんだんと新田開発が進み土地が開墾されてきたと同時に地名意識も移動した。

古代越中「トナミ」の地名由来は、現時点では意味不明。しいて推論するならば、古代越中の砺波郡においては、現在の小矢部から高岡市西山丘陵辺りが、当時、人と人との交流が盛んな位置であった。地名とは柳田国男がいうように、二人以上の共通の符号である。よって、高岡市西山丘陵から旧福岡町そして小矢部市に続く形状は、今でも朝霧(遠く)に谷間や山々が幾重にも出入りしている地勢で、その形状があたかも波を打つようにみえる。古代越中当時も現在のような形状であったのではなかろうか。この形状の意より「トナミ」と命名されたのではないか。」と推測したい。

【その他、引用・参考文献】

- ・高岡市万葉のふるさとづくり委員会『大伴家持と越中万葉の世界』(昭和 61 年 雄山閣)
 - ・高岡市万葉歴史館編『ふるさとの万葉 越中』(平成 2 年 桂書房)
 - ・中葉博文「平成 9 年度:学習講座『古代をまなぶ』 第 1 回目担当 資料」(平成 9 年 高岡市万葉歴史館)
 - ・中葉博文『北陸地名伝承の研究』『『万葉集』にみる二上山雑考』(平成 10 年 五月書房)
 - ・高岡市万葉歴史館編『越中万葉百科』(平成 19 年 笠間書院)
 - ・中葉博文「平成 27 年度高岡地区教養講座 古代射水郡(こほり)に属する地名 資料」(平成 27 年県民カレッジ高岡地区センター)
 - ・『富山県の地名』(日本歴史地名体系第十六巻)(平成 6 年 平凡社)
 - ・『角川日本地名大辞典 16 富山県』(昭和 54 年 角川書店)
- ※ 「万葉歌」は、小学館の『日本古典文学全集』の『萬葉集』(三)～(四)による。

1 講座趣旨

砺波平野の散居村および周辺における歴史、文化、地域社会の現状などに関する学びを通し、地域理解を深めるとともに、全国に誇りうる散居村の魅力を発信し、ついでに、望ましい形の景観保全と活性化につなげる。

2 後 援 砺波散村地域研究所

3 会 場 となみ散居村ミュージアム情報館・研修室

4 講師紹介

昭和32年 氷見市に生まれ

金沢経済大学経済学部経済学科(日本経済史専攻)卒業

奈良大学文学部史学科(古代史・地名伝承学専攻)卒業

昭和58年 富山県立高等学校教諭(社会科)として採用。

高岡商業高校を皮切りに、県立高校で教鞭を執り、となみ野高校教頭 兼富山県民生涯学習カレッジ砺波地区センター副所長を最後に退職。

その間、高岡市万葉歴史館、富山県「立山博物館」等の博物館に出向し、県内の歴史、地名伝承について研究を深める。

退職後は再任用教諭として、また現在は高校非常勤講師として教壇に立つ。

専門分野 地名研究

所 属 日本地名研究所理事、日本民俗学会会員、

日本温泉地域学会会員、西郊民俗談話会会員。

5 お知らせ (1) 受講は事前申し込み制とします。

(2) 受講料500円の講座では、お一人、年間通算2,000円を上限とします(つまり、このような講座は5回目以降の受講は無料となります。)

なお、見学会等の参加料は別枠とし、その都度、参加料をお知らせします。

6 次回以降の講座計画 (10月まで。日程・内容は変更する場合があります。)

期 日	テ ー マ (○は受け付け中)
7月19日(土)	○ 民俗学「民具を活用した回想法について」 氷見市立博物館長 小谷 超 氏
8月 9日(土)	○ 考古学「考古学が立証する砺波平野の地震歴」 県文振財団 埋蔵文化財調査課副主幹 越前 慎子 氏
9月20日(土)	歴史学「農業土木が支えた砺波平野の開拓史」 砺波郷土資料館学芸員 清水 麻美 氏
9月27日(土)	※庭木剪定講習会 (一般向け)
10月11日(土)	古典学「万葉集から読み取る 大伴家持のとなみ野」 高岡市万葉歴史館 図書情報課長 関 隆司 氏

※は、受講料は1,000円となります。